

## 近世期資料におけるト書きの史的研究：接続表現 トの成立を中心に

著者	谷 由貴
雑誌名	国立国語研究所論集
号	16
ページ	107-127
発行年	2018-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001610">http://doi.org/10.15084/00001610</a>

## 近世期資料におけるト書きの史的研究

——接続表現トの成立を中心に——

高谷由貴

大阪大学 博士後期課程／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

日本語接続表現の史的研究においては、次のような見解が共有されてきた。日本語には固有の接続表現は存在せず、他の品詞からの派生であるとの見方である（京極・松井 1973、岡崎 2013 他）。その派生の一種として接続助詞から接続表現への変化も指摘されてきた（小柳 2016、Matsumoto 1988 他）。

このような先行研究の流れに対して本稿では、戯曲・文芸・話芸作品に見られる接続表現トの成立について、これまで論じられてこなかった「ト書き」との関連が存在するという仮説を述べるものである。

歌舞伎台帳やドラマシナリオといった戯曲における「ト書き」には、演技・演出の指示の役割があることはよく知られている。この歌舞伎台帳の文体は洒落本等同時代の文芸作品に影響を与えたことが知られる。洒落本では「ト書き」に表記・意味の点で共通する形式「割書」が用いられた。「ト書き」「割書」を観察すると、共通した特徴が多く見られる。近代・現代散文作品における「地の文」においても、その影響が観察される。本稿では「ト書き」「割書」から近代小説の「地の文」に受け継がれた要素として引用のトと接続表現のトがあるという主張を行う。

以下、各節で扱う内容を述べる。まず、先行研究における接続表現トの扱いとその問題点を指摘した上で、ト書きの様々な使用を分析する。続いて、散文作品における「地の文」にはト書き・割書と同様に接続表現トの使用が見られることを述べる\*。

キーワード：地の文、接続表現、ト書き、ト

### 1. はじめに

先行研究においては、日本語には固有の接続表現は存在せず、他の品詞からの派生により成立したとの見解が一般的である（京極・松井 1973、岡崎 2013 他）。この、他品詞からの派生の一種として、接続助詞から接続表現への変化も指摘されてきた（小柳 2016、Matsumoto 1988 他）。

このような先行研究の流れに対して本稿では、戯曲・文芸・話芸作品に見られる接続表現トの成立には、「ト書き」との関連が存在するという、これまで論じられてこなかった仮説を述べるものである。

近代及び現代日本語において、接続表現「ト」は以下のように小説の地の文等で使用される。本節ではこのような接続表現トを取り上げ、その成立について論じる。以下に接続表現トの例を示す。例文中の下線部などは、特に注記がない限り、筆者が付したものである。

\* 本稿は日本語学会 2017 年度春季大会（2017 年 5 月）の口頭発表「『明治の文豪』における接続詞「と」について—接続助詞との共通点から—」を改稿したものである。本稿の一部は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」（プロジェクトリーダー：小木曾智信）の研究成果である。

- (1) 一やがて、その紅の色は、ぼとりと、サモンピンクに染められた氷原の上に、右から左へと同じ間隔を置いてふえて行く。とその血にも似た紅が、火炎のようにめらめらと燃えはじめた。  
(BCCWJ 菊地慶一『流水 白いオホーツクからの伝言』)
- (2) 本来貞之助は、孰方かと云えば放任主義で、殊に女の児の躰は母親の方針に一任して置けばよいと云う建前であったが、近頃は、(中略) これからの女子は剛健に育てて置かなければ物の役に立たないと云うことを、憂慮するようになっていた。と、或る時貞之助は、悦子がお花と飯事遊びをするのに、注射の針の使いふるしたのを持って来て、芯が藁で出来ている西洋人形の腕に注射しているのを、ふっと見かけたことがあった。(後略)  
(谷崎潤一郎『細雪』1943-1948, 中央公論社)
- (3) やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱を此帯でしつかり括つて (後略)  
(夏目漱石『吾輩は猫である』)

(1) の例は、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの一例で、自然紀行の書籍から採取されたものである(ただし、この部分は三浦綾子『続氷点』の文章が引かれている)。紅の色が「ふえて行く」と、すぐに「めらめらと燃えはじめた」という描写の際にトが使用されている。(2) は現代語の小説、(3) は明治時代の小説の地の文におけるトの使用例である。(2) では、貞之助が悦子のことを「憂慮するように」なっていたところ、「悦子が(中略) 芯が藁で出来ている西洋人形の腕に注射しているのを、ふっと見かけたことがあった。」と続く場面である。(3) の例では陰士が「あたりを見廻」したところ「縮緬の兵古帯がある」のを発見する。

このようなトは、上に挙げたような近代・現代語の小説の地の文においてしばしば見られ、ある事態と、別の事態の継起的な展開を示す際に使用される。先行研究において、条件表現の一種である接続助詞トからの文法変化(小柳 2016: 66-67)の結果生じたと論じられてきた。これについては、2節で、未だ解決されない問題点があることを示す。その上で、今まで分析されてこなかった戯曲の「ト書き」におけるトの使用に注目する必要性を述べる。歌舞伎台帳等の「ト書き」には、演技・演出の指示の役割があることはよく知られている。歌舞伎台帳の文体は洒落本等同時代の文芸作品に影響を与えたことが知られ、そこでは「ト書き」に表記・意味の点で共通する形式「割書」が用いられた。「ト書き」「割書」を観察すると、近代散文作品における「地の文」においても、その影響が観察される。本節では「ト書き」の分析を行い、近代小説の地の文に受け継がれた要素として、(2)(3) のようなトの接続表現としての使用があることを述べる。

以下、1.1 節及び 1.2 節において先行研究とその問題点を述べる。2 節において調査資料及び調査方法を、3 節において「ト書き」の分析、4 節において「割書」の分析結果を示す。5 節において近代劇・現代劇の「ト書き」の分析を、6 節で近代・現代の文芸作品の「地の文」の分析を行い、7 節でまとめを記す。

### 1.1 先行研究とその問題点

本節では、接続表現トに関連する先行研究を概観し、その問題点について述べる。第一に、接続表現トがいつごろから、どのような資料において確認できるかという問題である。第二に、その成立に関する解釈の問題について述べる。これについては2.2節でも触れていく。

第一点目であるが、接続表現トは、近世前期から狂言台本に見られ始めることが小林（1996）によって指摘されている。しかしながら小林（1996）において挙げられた近世期の接続表現トは狂言資料の一例のみであり、その後の展開については明らかではない。そのため、近世後期以降の接続表現トの意味についてさらなる調査が望まれる。

その後の時代の資料について、筆者の調査により判明していることを述べる。近代語においては小説の地の文で、また、現代語では小説の他、ドラマシナリオのト書き、児童文学等にもトは確認される（高谷 2017）。しかし、それ以外には見られることは少なく、限られた文体において用いられる表現であると言える。現在までの調査においては、近代語・現代語に関してトが使用され得る文体には、「会話」と「地の文」に分かれているという原則が成り立つ。ある小説に接続表現トが確認されても、同作者の随筆には確認されないということも起こる。そのため、文学作品ではなくとも、会話と地の文が混在する（4）のような記事等でも確認される。ここでは、会話の途中で「通りすがりの」人物が割り込んでくる際に、「と、ここで…」のように使用されている。

- (4) 二村 まだ女性が年上の男性と結婚する傾向が強い、ということですよ。それで30～40歳くらいの男性は、まだふらふらしてる人も多い、と。それってどういう男たちなんだろうなあ。

（と、ここで隣りで一人で黙って飲んでいた謎の男性が話しかけてきました）

通りすがりのコンサルタントH（以下、コンサルH） ちょっとすみません。僕もその話、興味があって調べていたんです。話に混ざってもいいですか？

二村 えっ、ああ、どうぞ（後略）

（二村ヒトシ×川崎貴子@新宿・ゴールデン街（第1回）2015.07.02  
<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/43962> 2017/12/03 最終確認）

このような、会話と地の文に分かれている資料に現れるという特徴に注目した先行研究は現在のところ見当たらない。トが使用され始めた近世後期の資料についても、この特徴に留意した調査を行う必要がある。この特徴に該当する資料として、本稿では戯曲資料のト書きに着目する。

第二点目は、接続表現トの成立についてである。先行研究は助詞トから接続表現トが成立したと述べている（小柳 2016, Matsumoto 1988 他）。それに対して、筆者はト書きから成立した可能性が見られるという主張を行う。先行研究において、狂言資料に見られる接続表現トは、接続助詞トと同様の用法で使用されており、両者の共通性が指摘されている（小林 1996: 220）。また、小柳（2016）においても中世末（16世紀末）以降における接続助詞と接続表現の文法変化の一例として報告されている。しかし、これについては以下の理由から検討の余地があると思われる。

接続助詞が自立し、接続表現へと変化する要因として、接続助詞が終止連体形に付くこと、接続助詞が文の「意味内容に関与しない」こと、の二点が挙げられている（小柳 2016: 66-67）。接続助詞が分離しても、それぞれの節が文として意味的に自然に成立することから、接続助詞から接続表現への変化が起り易いというものであった。

これに対して筆者は、文法変化の方向性に異論をとるものではない。しかし、個別の例について成立過程を論じる趣旨の研究はこれまで見当たらないため、検討の余地があると考えている。

以上に主な先行研究について述べた。助詞の意味的な変化について論じた先行研究に対し、本論は助詞トから接続表現トへの変化が生じた可能性を否定するものではない。

しかしながら、接続表現トはその使用が物語等の地の文等に多く見られるが、会話文には現れない等、助詞トとは異なる特徴があり、また、ト書きに類似する接続表現トの使用例も小説に見られることから、今回のト書きとの関連の可能性の提示を行うものである。

(5) (前略) これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぼんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告ったお千が、打傾いて優しく口許をちょっと曲げて傾いて、「待って、待って、」  
(泉鏡花『歌行燈』)

この助詞ト（一つ目）と接続表現ト（二つ目）の相違点については次節で詳しく述べる。

## 1.2 助詞トと接続表現トの共通点及び相違点

本節では、接続表現トと助詞トの意味における共通点と相違点を述べる。両者の意味が完全には重ならないことから、接続助詞トから接続表現トへの変化という観点で論じられてきた先行研究の見直しの必要性を指摘する。

まず、両者の共通点について、先行研究の議論を述べる。助詞トについて、現代日本語に関しては前田（2009）、益岡・田窪（1992）、益岡編（1993）などに詳しい。益岡編（1993）によれば、助詞トは「現実には観察される継起的な事態の表現」とされている。また、前田（2009）によれば、助詞トの中心的な用法は「非仮定的な用法」とされている。この「非仮定的」用法の助詞トは、継起的な動作の連続や、動作と状態の連続の際に用いられるとされており、これは接続表現トと共通している。以上が助詞トと接続表現トの共通点である。次に、助詞トと接続表現トの相違点について、筆者の見解を中心に述べる。

前節において、接続表現トは会話文中には現れないという特徴が見られることを述べた。接続表現トは文芸作品の「ト書き」や「地の文」等には使用されるが、会話文や報告書、論文などには使用が見られず、物語の推移を描写する文章に見られるという特徴がある。接続表現トを助詞トと比較すると、仮定条件及び一般条件の用法は接続表現トには見られない。接続表現トは、一回性の動作と動作が即時的に継起する際に用いられる。この「即時的」継起とは、前接部と後接部の間に時間的な隔たりが見られないことを指す。以下の2例を見られたい。

- (6) 周さんも、王さんも、ぼくとはなれ、もう勝手にしてくれ、といたげな表情だったように思う。とその時だった。ぼくが広場の中心にもどって、昔のバス停や食堂のあった通りに、住宅がどうつながっていたか考えなおして見ようと思いたった時だ、(後略)  
(BCCWJ 水上勉『瀋陽の月』)
- (7) コンビニの手前の四辻を右に折れると、車がやっと一台通り抜けられるほどのせまい路地に入る。林や長い生け垣にはさまれた路地を、何度か曲がりながら、さらに十分ほど歩く。と突然、古い大きな屋敷ばかりの家なみに突きあたった。中でもひときわ目立つ大きな家の表札に、「瀬川」の二文字を見つけた。二階建ての四角い建物を、ツタのはう石塀がぐるりとかこんでいる。  
(BCCWJ 泉啓子『サイレントビート』)

(6) では、一人称主体による動作の後に別の事態が即時的に継起している。(7)においても、歩いていたところ「突然」古い屋敷の家並みに突き当たる場面である。このように接続表現トには即時的な事態描写の例が多く見られる。一方で、「3ヶ月後」「一週間後」といった長期の期間の後に事態が生じる際の描写には用いられない。

それ以外にも、助詞トの場合には不自然となるが、接続表現トにおいては使用が見られる場合がある。前接文において、状態性の述語が置かれた(8)のような場合も、助詞トの使用は考えにくい。

- (8) コツコツ廊下から剥啄をした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身に伸びて、「カム、イン、」と猶予わずに答えた。  
(泉鏡花『婦系図』)

「剥啄をした者がある」という次の瞬間に教頭が「目金を光らした」という動作を描写している。このような状態性述語に付くことが可能であるという特徴は、助詞トと異なるものである。以上に挙げた接続表現トの特徴をまとめると次の二点となる。

- 接続表現トは物語の「地の文」、戯曲の「ト書き」などにのみ見られる。
- 即時的な事態の連続を示すことが多く、前後の事態が長期の時間を空けて生じる際には使用できない。

ここまでで助詞トと接続表現トを比較し共通点及び相違点について述べた。接続表現トと助詞トの共通点・相違点がいずれも観察された。助詞トから接続表現トへの変化が起こった可能性もあるが、「ト書き」と共通する特徴も接続表現トは持っておりその分析が必要である。次節では、調査の目的として、戯曲の「ト書き」、小説の「地の文」といったトが使用される文章に注目し、その使用を記述していく過程で、調査方法・分析基準なども記す。

## 2. 調査の目的及び方法

### 2.1 調査の目的

前節まで先行研究では、トの特徴を踏まえた調査が不足していると問題提起を行った。本節で



は、トの特徴を調査する資料として、小説に加え戯曲の「ト書き」におけるトの使用に注目する必要性を述べる。歌舞伎台帳に見られる「ト書き」には、演技・演出の指示の役割があることはよく知られている。歌舞伎台帳の文体は洒落本等同時代の文芸作品に影響を与えたことが知られる。洒落本においては「ト書き」に表記・意味の点で共通する形式「割書」が用いられた。歌舞伎台帳の「ト書き」・洒落本の「割書」を観察すると、近代散文作品における「地の文」においても、その影響が観察される。本稿では「ト書き」「割書」の分析を行い、近代小説の地の文に受け継がれた要素として、前掲の(3)のようなトの接続表現としての使用があることを述べ、その用法を通時的に記述することを目的とする。次節では、調査資料及び調査方法についてまとめる。

## 2.2 調査資料

前節で述べた目的に沿い、調査に使用する資料を選定した。

まず3節では、勉強出版刊行の『歌舞伎台帳集成』における「ト書き」を観察する。その後、4節では、洒落本における「割書」を調査する。この節では、国立国語研究所の『ひまわり版「洒落本コーパス」』所収の用例及び、『洒落本大成』第14巻・第26巻の作品を対象とする。

続いて5節では、近代及び現代の戯曲における「ト書き」を調査する。資料として、筑摩書房刊行の『明治近代劇集』と、シナリオ作家協会編(2006)『年鑑代表シナリオ集〈05〉』を対象とする。

また、6節では、近代及び現代の小説等における「地の文」を調査する。新潮社(1997)『新潮文庫 明治の文豪 CD-ROM 版』に収録された全文、及び国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』における小説・雑誌全体を対象とする。

なお、追加資料として『圓朝全集 巻の二』(近代文芸資料複製叢書、世界文庫)の用例も対象とした。

本稿で示す調査結果は、下記の資料を調査対象としたものである。

### ○歌舞伎台帳

「心中鬼門角」(中田猪同 1710 [宝永7] 初演) \* 『歌舞伎台帳集成』第1巻

「契情鸚鵡石」(奈良井文輔 1738 [元文3] 初演) \* 『歌舞伎台帳集成』第45巻

### ○洒落本

「通言総籙」(1787 [天明7]) / 「一向不通替善運」(1788 [天明8]) \* 『洒落本大成』第14巻 / 「当世粋の曙」(1800 [文政3]) \* 『洒落本大成』第26巻

「聖遊廓」(1757 [宝暦7]) \* 『洒落本大成』第26巻 / 「河東方言箱まくら」(1822 [文政5]) / 「玉菊全伝花街鑑」(1822 [文政5]) \* 『洒落本大成』第27巻 (1978-1988 中央公論社) … 国立国語研究所(2015)『ひまわり版「洒落本コーパス」(日本語歴史コーパス江戸時代編)』(以下、『洒落本コーパス』と略記)に所収

### ○近代劇資料

依田學海「政党余談淑女の後日」(1889 [明治22]) 『明治近代劇集』

### ○近代落語資料

三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」(1926 [大正 15] -1928 [昭和 3])『圓朝全集 巻の二』

### ○近代小説

新潮社(1997)『新潮文庫 明治の文豪 CD-ROM 版』(以下、『明治の文豪』と略記)の全文

### ○現代劇資料

羽原大介・井筒和幸「パッチギ！」(2005 [平成 17])／内田けんじ「運命じゃない人」(2005 [平成 17]) \* 『年鑑代表シナリオ集 〈05〉』

### ○現代小説・雑誌

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』における小説・雑誌全体

## 2.3 調査方法

続いて、調査方法について述べる。コーパスに関しては、前述の国立国語研究所(2015)による『洒落本コーパス』に収録された全文を対象に、「語形/完全一致-ト」を指定し検索を行った(808例)。次に検索結果をダウンロードし「助詞-格助詞」を抽出した(767例)。最後に、「本文種別-割書」と指定されたものを確認した(320例)。「格助詞」の指定を行う理由は、洒落本コーパスにおいて引用トが「格助詞」として登録されているためである。格助詞以外の用例は「接続助詞」40例「名詞」1例であった。本文種別が「割書」となるものを対象とした理由は、歌舞伎台帳のト書き及び小説地の文との比較を行うためである。本文種別が空欄となっているものが174例あるが、これらについては今後調査することとし、今回の調査対象には含んでいない。「コーパス以外の資料」については割書を目視にて確認、計上した。

『歌舞伎台帳集成』については、第1巻収録の「心中鬼門角」及び第45巻に収録の「契情鸚鵡石」における全てのト書きを目視で確認し、2.4節に示す基準に沿って分類した。

近代劇の「政党余談淑女の後日」(1889 [明治 22] 年、『明治近代劇集』)及び、現代劇の「パッチギ！」／「運命じゃない人」(2005 [平成 17] 年、『年鑑代表シナリオ集 〈05〉』)についてもト書きを目視で確認した。

近代小説に関しては、新潮社(1997)『新潮文庫 明治の文豪 CD-ROM 版』に収録された全文を調査対象とし、文字列検索で「と」を抽出し分類した。追加資料として『圓朝全集 巻の二』(近代文芸資料複製叢書、世界文庫)の用例も目視で確認した。

現代語に関しては、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』における小説・雑誌全体を対象とした。調査の手順は、品詞の大分類を「接続詞」とし、「語形」を「ト」として検索を行った。

## 2.4 分析基準

引用のトと接続表現トとの峻別の基準には、藤田(2000)を参考にした。引用構文に関して藤田(2000)は、述部の特徴からI型・II型に大きく分類している。それによると、I・II型はそれぞれ以下のように定義されている。



I - 述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す。

II - 述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。 (藤田 2000: 31)

藤田 (2000) を参考にすると、引用は、発話・思考と同時に、その発話者の動作が生じるものと考えられる。本稿では、この I・II を合わせてトの「引用」としての使用として計上した。

引用と接続表現トの峻別の具体例として『歌舞伎台帳集成』から例を挙げる。

(9) 十〔鬼貫〕 こりや 舞舞 一つ飲め

源〔藤次郎〕 たばませうでゑす

トずつと面テいただいている ト十町〔鬼貫〕 源七〔藤次郎〕ヲ見る

(〔契情鸚鵡石〕 p.17)

(10) 久〔巻絹〕 涙の春雨降るとや申ス

ト甚之助〔歌木〕中へは入ツて おかしやんせと 久菊〔巻絹〕を突きのける

(〔契情鸚鵡石〕 p.21)

(9) のト書きの「トずつと…」は藤田 (2000) の引用構文の II 型にあたると思われる。一方で、動作と動作が継起的に起こる際に使用されるトも「ト十町 源七ヲ見る」の部分に見られ、両者を分けて計上した。(10) は台詞の発話者以外の動作が続き、引用と類似性が見られる。これも分けて計上した。

以上で、接続表現トと引用を区別する基準を述べた。この基準により、本稿ではトを以下のように分ける。

(11) ①引用 (I・II)

②台詞とその発話者以外の動作・状態が継的に描写される「ト」

③動作・状態が継的に描写される「ト」

本稿では、(11) における②③のトを「接続表現のト」と呼ぶこととする。次節以降では、「ト書き」「割書」「地の文」におけるこれらのトの使用を詳細に見ていく。

### 3. 歌舞伎台帳における「ト書き」の分析

本節では、歌舞伎台帳における「ト書き」の特徴を述べる。ト書きは、小学館刊行の『日本国語大辞典 第二版』<sup>1</sup>によると「演劇脚本で、せりふに添えて演技、演出、舞台装置などの説明を書き示したもの。歌舞伎脚本などで「ト幕明く」「ト思入れあつて」などと書いたところからいう。」とされる。この記述を踏まえるとト書きには、「ト幕明く」のような演出指示や、「ト思入れあつて」のような引用のトが多く観察されることが予想される。しかしながら、実際の例を観察すると「ト書き」において、①引用のト以外に②「台詞-動作」の「ト」が見られる。『歌舞伎台帳集成』

<sup>1</sup>『日本国語大辞典 第二版』(2002, 小学館) <http://japanknowledge.com.remote.library.osaka-u.ac.jp/library/> (2017/07/19 確認)

第1巻に収録の「心中鬼門角」(中田猪同 宝永七[1710]年初演), 第45巻に収録の「契情鸚鵡石」(奈良井文輔 元文三[1738]年初演)における全てのト書きを調査したところ, 両者とも①引用の例が圧倒的に多く見られる一方, ②「台詞-動作」や③「動作-動作」といった引用以外のトも少数ではあるが見られた。表1に結果をまとめた。

表1 『歌舞伎台帳集成』における「ト書き」

	「心中鬼門角」	「契情鸚鵡石」
①引用	105	222
②台詞-ト-動作	5	23
③動作-ト-動作	0	17
合計	110	262

以下に具体例を挙げる。まず①引用の「ト」の例である。

- (12) 源七〔藤次郎〕 そんなら われらも  
ト右の袂をとらまへる (「契情鸚鵡石」 p.21)

上の(12)では「そんならわれらも」という台詞の後にその発話者の行為「右の袂を…」が続く。次に②の例で, 台詞の後に「ト書き」が記されるが, 台詞の発話者以外の人物の動作などが描写されるものを挙げる。

- (13) [(10) 再掲]  
久〔巻絹〕 涙の春雨降るとや申ス  
ト甚之助〔歌木〕 中へは入って おかしやんせと 久菊〔巻絹〕を突きのける  
(「契情鸚鵡石」 p.21)

(13)の例は(12)のような「台詞」の引用ではなく, 久菊〔巻絹〕という人物の発言の後に続いて甚之助〔歌木〕という別の人物が「中へは入って」来るという動作が続く。このように「台詞」の後に「ト」が続き, その後「台詞の発話者以外の動作」が続くものがト書きにしばしば見られる。前節の基準における②台詞と発話者以外の動作・状態が継起的に描写される「ト」である。この(13)のようなトが近世期では『歌舞伎台帳集成』のト書きにおいて見られる。

さらに, 「契情鸚鵡石」「心中鬼門角」における②「台詞-ト-発話者以外の動作」の例を挙げる。

- (14) 源次〔はつ〕 そりや狭もうて寝られまい  
又〔じゆゑん〕 わたくしは柵へ上がつてふせります  
ト皆／＼笑ふ (「契情鸚鵡石」 p.7)
- (15) 庄〔五兵衛〕 (前略) 親父殿も兄弟衆も 必胸を落し付ては入て被下い  
ト皆々は入ル (「心中鬼門角」 p.38)

この(14)と(15)については, 接続表現トの直前の台詞発話者とその後の動作主が異なり,

台詞と動作の継起的な接続であると言える。

③の具体例も挙げる。

(16) 源七〔藤次郎〕 歌ひける／＼

ト踏む ト久菊〔巻絹〕 源七〔藤次郎〕が胸づくしヲ取つて (〔契情鸚鵡石〕 p.21)

(16) ではトに二カ所下線を引いたが、前者は台詞のすぐ後に見られるもので、引用Ⅱ型のトである。これに対して、もう一方のトは、ト書きの中途に現れており③接続表現のトと判断した。

ここまで歌舞伎台帳のト書きの「ト」を観察した。①引用、②台詞と発話者以外の動作・状態が継的に描写される「ト」及び、③動作・状態が継的に描写される「ト」の例が確認された。これと似た特徴が、洒落本等近世期の散文資料においても見られることを次節で述べる。

#### 4. 洒落本における割書の分析

前節では、「心中鬼門角」「契情鸚鵡石」のト書きには、2.4節の(11)分析基準で挙げた三種のトが見られることを述べた。最も多く見られたものが①引用のトであり、その次に②引用と類似した「台詞－ト－発話者以外の動作」となる接続表現トが多く観察され、ごく少数の③「動作－ト－動作」の接続表現トが確認された。

本節では、調査で得られた洒落本の割書におけるトについて、歌舞伎台帳における接続表現トと比較し両者の共通点を示す。洒落本コーパスのデータ、及びコーパス以外の洒落本資料については、2.3節の調査方法で述べた方法で抽出した。歌舞伎台帳との比較を行うに当たり、「ト書き」「割書」の類似性について次節で確認した後、分析に入る。

##### 4.1 「ト書き」との類似

洒落本は、歌舞伎台帳及び小説文体との類似性が指摘されている。まず、洒落本と歌舞伎台帳との文体上の類似性については、浜田(2012: 30)で「標準洒落本は会話体文学で、(中略)すなわち、〈to〉<sup>2</sup>で始まる行為と会話との結合になるから、それは歌舞伎の台本の形に類似である。洒落本文体の形成は歌舞伎界の記帳法を承けるものであると認めるのは当然の定説である」と指摘されている。さらに、同じく浜田(2012)では洒落本の文体を小説文体の一型として捉え、洒落本の二行小書について次のように述べている。

(17) 二行小書は、〈と〉二行小書で始まったものという事である。それが〈ト〉二行小書に移したのであった。〈to〉二行小書の言葉の用い方が歌舞伎台帳のト書にヒントを得ているということは誤りではないが、台帳の形をそのまま移したのではなく、(中略)小説系の描写文芸として執筆され、それがジャンルとして安定して存在するようになってから、あらためて台帳の記述法に寄り沿って〈ト〉を用いるようになったものと解される。

(浜田 2012: 35-36)

<sup>2</sup> 浜田(2012: 30)では、「発話の末尾」を受ける「と」あるいは「ト」を以下〈to〉と記すとされている。

このように、洒落本は文芸作品として歌舞伎台帳・小説双方との関わりを指摘されている。この洒落本の二行小書（洒落本コーパスにおける本文種別により今後「割書」と記述する）を観察し、引用トと接続表現トとの連続性の検証を行う。次節では、『洒落本コーパス』及びコーパス以外の洒落本資料における「ト」を抽出・調査し、歌舞伎台帳の「ト書き」との共通点が見られることを指摘する。

#### 4.2 割書における接続表現ト

本節では、調査で得られた洒落本の割書におけるトについて、歌舞伎台帳における接続表現トと比較しつつその分析結果を示す。

歌舞伎台帳のト書きについては3節でも述べたように、①引用の例が圧倒的に多く見られる一方、②③の接続表現のトも少数ではあるが見られた。洒落本の「割書」についても同様の傾向が見られた。

表2 洒落本における「ト書き」

	『洒落本大成』			
	「通言総籙」	「一向不通替善運」	「当世粹の曙」	「洒落本コーパス」
①引用	43	27	45	314
②台詞トー動作	7	2	2	6
③動作トー動作	2	0	1	0
合計	52	29	48	320

以下、まず割書の結果についてまとめ、その後歌舞伎台帳との比較を行う。

割書のトには、2.4節の分析基準で挙げた(11)のトのうち①②③全てが見られた。①引用の例はいずれの作品においても多数観察された。②の接続表現トは合計17例のみであったが確認された。③については今回の調査対象から3例のみ確認された。②について例を挙げる。

(18) けしてしまひひす 延 それを消ば。何にもいひぶんはねへ 玉 随ぶん。けしてしまひ  
ひす ともぐさのにはほふ屏の内しばしことばもなかりける 次の間には。堅兵へが酔倒れ  
たる躰に見せ。襖のかたへ身を（後略）（「玉菊全伝花街鑑」）

(19) どふでもよろしいが。しかしあの子はおまへさんのはらへはまる子じゃないが。  
なんぞくり出しなさるのか と小めろをよびて松江をいふてやる  
八 くり出すこともないが。ちとたづねたい事がある。（「河東方言箱まくら」）

(18) では玉の「けしてしまひひす」という台詞の後、続いて物語が「ことばもなかりける」と記述されている。「引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。（藤田2000: 31）」とは判断できないため、②と判断した。

(19) で「なんぞくり出しなさるのか」と聞いた玉の台詞とその後に続く「小めろをよびて」は発言と共存する動作ではなく継起的なものと思われ、これも②とした。

比較対象として挙げた歌舞伎台帳のト書きのうち、最も多く見られたものが①引用のトであり、その次に②引用と類似した「台詞－ト－発話者以外の動作」となる接続表現トが多く観察され、ごく少数の③「動作－ト－動作」の接続表現トが確認された。③についても割書の例を挙げる。

(20) 女房 さやうなら ト酒になる。とゑん次郎へ又酒まはる (「通言総籙」 p. 49)

二カ所に下線を引いた。③の例は二つ目の「と」である。「酒になる」という場面から「ゑん次郎」の描写となっている。

(21) 露 ヤアおもしろい／＼おれもおどろ  
トかたぬいでどんハト一所におどるゑらさわぎとなり露雪おどるひよしに盃洗の鉢をひく  
 りかえずト座敷は水だらけとなる (「当世粹の曙」 p. 295)

『洒落本大成』第26巻に所収の「当世粹の曙」においても、ト書き48例のうち(21)のように「ト書き」のなかで動作と動作の連続の際にトが使用される③の例が1例のみであるが見られた。このような「ト」は歌舞伎台帳「契情鸚鵡石」においても観察された。3節の(16)を参照されたい。

ここまで表2にまとめた用例について述べた。洒落本における割書と、歌舞伎台帳のト書きにおけるトを比較すると、両者とも①引用が圧倒的に多く、②③の例も少ないながら観察された。演出指示のためのト書きと、物語の記述である割書という文体の違いはありながらも、「ト」の使用については両者に共通点が見られる。以上の結果に付け加えて、洒落本コーパスの割書トにおいて、以下のような例が見られることを指摘する。(22)(23)は副詞節が引用句と動作の間に挿入されているもので、歌舞伎台帳には見られない。

(22) 春 こちやはやうさんじやうと思ふてゐたけれど。九兵へさんがをなぶるによつて。見合てみました  
とあんどがあまりまくらもとゆゑ。少しを々のけたばこすいつけていだす (「河東方言箱まくら」)

(23) 花 市村さん御酒はどふでござります。もふとりませうか  
 市 もふよし／＼  
 花 さやうなら  
とあたりのあるざしきゆゑはやく。まくをきり。そこらをかたづけ。一間の西のすみと東のすみとに。 (「河東方言箱まくら」)

(22)の例は、春という人物の「見合てみました」の発話の後、割書が続く。「とあんどがあまりまくらもとゆゑ。少しを々のけ…」と、引用句と動作の前に「あんどがあまりまくらもとゆゑ。」という副詞節が挿入されているものである。このように、副詞節が挿入されたものが洒落本コーパスにおいて2例見られた。これらは、今回の基準では引用とした。

ここまで、「割書」の分析を「ト書き」と比較しつつまとめ、両者の共通点を指摘した。次節

はさらに後の近現代資料における「ト書き」について分析する。

## 5. 近代劇・現代劇における「ト書き」の分析

本節では、近代劇・現代劇における「ト書き」及び現代のドラマシナリオにおける「ト書き」の分析結果を述べる。

### 5.1 近代劇における「ト書き」

まず、近代劇について2.3節で述べた方法で、依田學海の「政党余談淑女の後日」(1889 [明治22]年発表)から用例を収集した。「政党余談淑女の後日」中の用例の合計は129例であったがそのうち②③の「ト」であると判断したものはそれぞれ10例・1例である。以下に具体例を挙げる。

(24) 頼國袴衣装好みの形にて書き物をして居る。此模様合方にて道具止まる。

と、向ふより茨木景耀、羽織、袴、帽子、すてつきを持ち、好の拵へにて出で来たる。跡より馬丁一人、黒鴨にて付て出で来たる。花道よろしき處にて

(「政党余談淑女の後日」p.54)

(24)は、『明治近代劇集』のト書きからの例で、「道具止まる。と、向ふより…出で来たる」と、演出上の指示の後に、人物の動作が連続して起こる様を描写している。これを③のトと判断した。さらに具体例を挙げる。

(25) 茨 よし／＼さあ／＼ゆき給へ／＼。

と、これにて藝者二人階子をおりてゆく。(「政党余談淑女の後日」p.44)

上の(25)の例では、台詞「…ゆき給へ」の後に「藝者」がおりていく様子が描かれる。このような「ト」が10例見られた。以下の(26)のように「此道具廻る」という演出指示もこれに含まれよう。

(26) 頼 さても無残な事ぢやよなア。

と此道具廻る。(「政党余談淑女の後日」p.37)

このような②台詞の発話者以外の動作が続いて生じる「ト」及び、③動作が継起的に起こる際に使用される「接続表現ト」については近代戯曲においても見られることが分かった。①②③全てが確認されるという特徴は、歌舞伎台帳・洒落本と共通する。

### 5.2 現代劇における「ト書き」

続いて、現代劇資料における「ト書き」の例を挙げる。いずれも映画の脚本の例である。

(27) あゆみの顔を見つめ、動かない宮田。

と、突然隣の席に同僚の高木、現れて、

高木「(小声)宮田…」

(「運命じゃない人」p.112)



- (28) オモニ「寝ているモトキを見遣り)こいつも学校出るまでは、面倒みたらなあかんしなあ」と、モトキが寝言でうなされ (後略) (「パッチギ!」 p.38)
- (29) (前略) 紀夫に向き直ろうとしたら、足を滑らせ、ナターシャも手を伸ばしたが、大屋根を滑り落ちていく。  
と、運良く地上のボロソファの上にドシン!と座って着地。 (「パッチギ!」 p.36)

これらの例を以下に再掲する基準に照らし合わせる。

- (30) [(11) 再掲]
- ①引用 (I・II)
- ②台詞とその発話者以外の動作・状態が継起的に描写される「ト」
- ③動作・状態が継起的に描写される「ト」

脚本には①引用の例も多く見られるが、ここで挙げたのは②と③の例である。(28)「…面倒みたらなあかんしなあ」の後に別の人物「モトキ」の演技が続く。これは②台詞と発話者以外の動作・状態が継的に描写される「ト」である。(27) (29) に関しては、③動作・状態が継的に描写される「ト」である。現代劇資料においても①②③のトが全て観察されることが分かる。

## 6. 近代小説・現代小説における「地の文」の分析

前節では、「ト書き」の分析を行い、主要な①引用以外に、②台詞とその発話者以外の動作・状態が継的に描写される「ト」及び③動作・状態が継的に描写される「ト」も見られ、この傾向が戯曲のト書き中で通時的に見られることを述べた。本節では、近代小説の「地の文」においても、様々な「ト」の用途が見られることを述べる。

まず以下に、動作・状態が継的に描写される「ト」の例を示す。

- (31) [(3) 再掲]
- やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱を此帯でしつかり括つて (後略) (夏目漱石『吾輩は猫である』)
- (32) そのとき「貴様は同級生の中で、誰が一番好きだ」といふ問題がゆくりなく出た。小學校時分の同級生が大分其周囲に集って居た。と、小滝は少しも躊躇の色を示さずに、「それア誰だつてさうですわねえ、……無論林さん!」と言った。 (田山花袋『田舎教師』)

上の二例は、『明治の文豪』に収録された小説の地の文におけるトの使用例である。(31)は、陰士が「あたりを見廻」したところ「縮緬の兵古帯がある」のを発見する場面である。(32)は同級生が「集まって居た」際に「無論林さん!」と質問に答えたという経緯を表している。これらは、(11)の分析基準で示したトの分類における①引用ではなく、③動作・状態が継的に描写される「ト」として使用されている。このような例に加え、明治期の小説には②台詞とその発話者以外の動作・状態が継的に描写される「ト」も少数ながら見られることが判明した。以下、

分析結果を順に述べる。

### 6.1 近代小説における「地の文」の分析

本節では、近代小説における「地の文」の分析結果を述べる。2.4節の分析基準における(11)を用いる。調査資料である『明治の文豪』において「ト」には①②③の用法が全て観察され、それぞれ①が2606例、②が1例、③が49例であった。

以下に、②台詞とその発話者以外の動作・状態が継起的に描写される「ト」及び③動作・状態が継起的に描写される「ト」の例を挙げる。

#### (33) [(5) 再掲]

(前略) これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とほんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告ったお千が、打傾いて優しく口許をちょっと曲げて傾いて、「待って、待って、」 (泉鏡花『歌行燈』)

(33)は該当の二カ所に下線を引いている。最初の「と」は、「誰でも弾けるのを借りて来やよ。」という台詞を言った人物「お千」の台詞の後に「小女の喜野」の動作が続くため、②に該当する。次の「と」は、「小女の喜野が立とうとする」という動作の後に「お千」の動作が続くため③に該当する。このような例は3節と4節において示した歌舞伎台帳・洒落本における「ト書き」「割書」と似通っていると言える。トが引用だけでなく、動作と動作の連続の際に使用され、また台詞の後に別の人物の動作が描写される点において、近代小説「地の文」と「ト書き・割書」は共通点がある。

③に該当する例には「いきなり」、「急に」、「そのとき」、「そこへ」等、その事態が短い期間内に出来たことを示す語が散見される。後接文中の出来事の時間関係に関して、次の(34)(35)の例を見られたい。

(34) お梅は夫が来たので、代って家に帰るべく母親に挨拶して茶の間に来た。と、お米はいきなり、「お梅さん、先程何を話していたの?」「え?」調子が烈しいので、若い細君は驚いて義姉の顔を見る。 (田山花袋『生』)

(35) 頭を散々悩ませつつ、一枚二枚は余所目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な処に出会ってグッと詰まると、まず一服と旧式の烟管を取上げる。と、又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから、不覚それに現を脱かし、肝腎の翻譯がお留守になって (後略)

(二葉亭四迷『平凡』)

(34)では、お梅が「茶の間に来た」後に「いきなり」お米さんに話しかけられており、(35)は「烟管を取上げる」という動作の後に「忽然として」昔のことが浮かぶという内容である。ある動作の後に次の動作が継起しており、前述の基準に照らし合わせれば③に該当する。

また、③に分類した49例の中には(35)「忽然として」や、「不意に」「いきなり」といった表

現がしばしば見られる。「いきなり」のような、後接表現中の事態が意図せず急に展開することを直接描写する語彙が含まれる例も7例見られた。それ以外の例も、直接的な語彙はなくとも、即時的な事態の描写を行うものであった。

## 6.2 現代小説における「地の文」の分析

本節では、現代小説における「地の文」の分析結果を述べる。国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』における接続表現トを調査した結果得られた25例を観察した。これらの例では、調査対象資料の性質上、接続表現トが使用されるのは小説・雑誌のみとなる。現代語・近代語においては、トは小説・児童文学の地の文、ドラマ・演劇等のト書きに見られることが分かっており、その一方で台詞等会話の文においては確認されていない(高谷2017)。具体的な例を挙げる。

(36) 父親の背中を長く見つめていることもできなかった。見てはいけないものが、今自分の目の前に立ちふさがっているのだとわかると、彼の視線はそこを離れようとした。とそのとき、彼は今まで視界に入っていたはずのそれを、ようやくとらえたのだった。縄が入口の鴨居にかけられ垂れ下がっている。(BCCWJ 大山尚利『チューイングボーン』)

(37) [(1) 再掲]

一やがて、その紅の色は、ほとりと、サモンピンクに染められた氷原の上に、右から左へと同じ間隔を置いてふえて行く。とその血にも似た紅が、火炎のようにめらめらと燃えはじめた。(BCCWJ 菊地慶一『流水 白いオホーツクからの伝言』)

この(37)のように、接続表現トは地の文において即時的な動作の連続の際に用いられている。BCCWJにおいては、このような③「動作-ト-動作」の接続表現が見られるが、②「台詞-ト-発話者以外の動作」のような、引用と類似した例は見られなかった。①②③の「ト」のうち、②は、BCCWJにおいては今回の調査では見られなかったこととなる。①引用と、③の接続表現トのみが見られる結果となった。

ここまで、BCCWJにおける接続表現トについて述べた。近代小説において見られた②が現代小説では見られなくなっていることが分かる。ここで、近代落語資料における「ト」についても、比較対象として記述する。

(38) 伴蔵「(前略) 畑へ埋めて置き、上へ印の竹を立て、置けば、家捜しをされても大丈夫だ、そこで一旦身を隠して、半年か一年も立って、ほとぼりの冷めた時分帰って来て掘出せば大丈夫知れる気遣はねえ」みね「旨い事ねえ、そんなら穴を深く掘って埋めてお仕舞いよ」と、すぐに伴蔵は羊羹箱の古いのに彼の像を入れ、畑へ持出し土中へ深く埋めて、其の上へ目標の竹を立置き立帰り、さアこれから百両の金の来るのを待つばかり、前祝いに一杯やろうと夫婦差向いで互に打解け酌交し、最う今にハツになる頃だからというので(後略)  
(三遊亭円朝「怪談牡丹灯笼」p.70)

落語資料においても①引用の例とともに②台詞の発話者以外の動作が続いて生じる「接続表現ト」が確認された。

表3 「地の文」における「ト」

	円朝落語	近代小説	現代小説
①引用	○	○	○
②台詞-ト-動作	○	○	×
③動作-ト-動作	×	○	○

この表について注目したい点は、②台詞の発話者以外の動作が続いて生じる「ト」が近代小説地の文及び落語において確認され、現代小説では観察されないことである。

以下では、近代小説における③の例を挙げる。

- (39) 声と共に、ふッと火を吹く息の音がした。と、何物か私の面の上に覆さったようで、暖かな息が微かに頬に触れ、「憎らしいよ！」と（後略）（二葉亭四迷『平凡』）

上記(39)は近代小説からの例である。「息の音がした」途端に「何物か」が「面の上に覆さった」様子が描写されている。

- (40) (前略)「御膳も碌に?……」「御膳も碌に召しやがらずに」確められて文三急に萎れかけた……が、ふと気をかえて、「へ、へ、へ、御膳も召上らずに……今に鍋焼餛飩でも喰たくなるだろう」おかしな事をいうとは思ったが、使に出ていて今朝の騒動を知らないから、お鍋はそのまま降りてしまう。

と、独りになる。「へ、へ、へ」とまた思出して冷笑った……が、ふと心附いてみれば、今はそんな、つまらぬ、くだらぬ、薬袋も無い事に拘っている時ではない。

（二葉亭四迷『浮雲』）

- (41) (前略) 今まで読だ書物の中でさるれえの「いるりゅうじょんす」ほど面白く思ったものは無いな。二日一晩に読切ってしまったっけ。あれほどの頭にはどうしたらなるだろう。余程組織が緻密に違いない……。さるれえの脳髓とお勢とは何の関係も無さそうだが、この時突然お勢の事が、噴水の迸る如くに、胸を突いて騰る。と、文三は腫物にでも触られたように、あっと叫びながら、跳ね起きた。しかし、跳ね起きた時は、もうその事は忘れてしまった、何のために跳ね起きたとも解らん。（二葉亭四迷『浮雲』）

上の(40)(41)の例も、③に分類したものである。即時性を表す具体的な語彙はないものの、継起的な事態を描写する際に使用されている。このような例は現代にも見られる。

表4 散文資料における「ト」

	『洒落本大成』				『明治の文豪』
	「通言 総籙」	「一向不通 替善運」	「当世粋の 曙」	「洒落本 コーパス」	
①引用	43	27	45	314	2606
②台詞-ト-動作	7	2	2	6	1
③動作-ト-動作	2	0	1	0	49
合計	52	29	48	320	2656

散文資料である洒落本割書の調査結果と併せて表4に示す。②台詞の発話者以外の動作が続いて生じる「ト」については、ごく少数であり、あまり変化していない。ここまで、小説における「地の文」の特徴をまとめた。

## 7. おわりに

本稿では、接続表現トの成立について明らかにすべく、会話と地の文により構成される戯曲作品を調査した。その結果、戯曲の「ト書き」等に様々な用途で使用されるトが見られた。戯曲のト書きには、大きく分けて三つの使用法が観察された。

その後洒落本コーパスの割書における接続表現トと引用との類似について述べた。トの分析基準(2.4節)に沿い、歌舞伎台帳のト書きと同じく洒落本の割書においても①②③のようなトが見られることを述べた(4節)。

### (42) [(11) 再掲]

①引用 (I・II)

②台詞とその発話者以外の動作・状態が継起的に描写される「ト」

③動作・状態が継起的に描写される「ト」

③の接続表現トについて、歌舞伎台帳、洒落本及び、近代劇・現代劇のト書きにおいて少数ではあるが確認された。

これらの結果からト書きの典型的な用途として、①演者の台詞の「引用」がある一方、それ以外の②③も観察されることが分かった。そして、この傾向は、時代が下り、近代劇や現代のドラマシナリオ等の資料にも見られることが分かった。この結果を表5にまとめる。

表5 歌舞伎台帳／洒落本／近代劇／現代劇における「ト書き」

	歌舞伎台帳	洒落本	近代劇	現代劇
①引用	○	○	○	○
②台詞-ト-動作	○	○	○	○
③動作-ト-動作	○	○	○	○

また本稿では、「ト」が使用される文体に注目し、小説を中心に、会話と地の文により構成さ

れる文芸／話芸作品を調査した。その結果、地の文において様々な用途で使用されるトが見られた。トの分析基準(2.4節)に沿って、歌舞伎台帳・洒落本と同じく近代小説においても①②③のような「ト」が見られることを述べた。

時代が下るにつれて変化している点も判明した。②について、落語資料及び、近代小説において少数ではあるが確認された。その一方、②は現代小説では観察されないことが分かった。以上が今回の調査結果である。

ここで今回の調査とこれまでの筆者による調査をまとめたものを表6に示す。

表6 各資料において確認された「ト」

	歌舞伎台帳	洒落本	近代小説 (明治の文豪)	近代劇	現代劇	現代小説 (BCCWJ)
①引用	○	○	○	○	○	○
②台詞-ト-動作	○	○	○	○	○	×
③動作-ト-動作	○	○	○	○	○	○

用例が1例でも確認できたものについて○を、そうでないものについて×を付した。②については今回調査した歌舞伎台帳、洒落本、そして近代劇のト書きにおいて少数ではあるが確認された。その一方で、現代小説の例をBCCWJにおいて調査したところ、②の接続表現トは見られなかった。BCCWJに台詞の後に話者以外の動作が続く②が確認できない点については、BCCWJ以外の資料において②のようなトが見られる可能性が残される。『年鑑代表シナリオ集〈05〉』におけるシナリオの用例には、以下のような②の例も見られる。そのため資料によっては現代日本語においても②の「ト」は使用されると言える。

(43) [(29) 再掲]

オモニ「(寝ているモトキを見遣り)こいつも学校出るまでは、面倒みたらなあかんしなあ」と、モトキが寝言でうなされ(後略) (「パッチギ!」p.38)

以上のように、本稿は従来接続助詞との関連が論じられてきた接続表現トについてト書きとの関連の可能性を提示するものである。本稿は従来の説である接続助詞由来の説を否定するものではないが、その中でこれまで触れられてこなかったト書きと地の文の共通点として接続表現としてのトの使用を指摘し、接続表現の由来に関する新たな側面を提示した。

### 参考文献

- 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』東京：和泉書院。  
 浜田啓介(2012)「『道中膝栗毛』の進行記述形式の成立について」『近世文藝』95:27-38。  
 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』東京：ひつじ書房。  
 小柳智一(2016)「文法変化の方向と統語的条件」大木一夫・多門靖容(編)『日本語史叙述の方法』55-73。東京：ひつじ書房。  
 京極興一・松井栄一(1973)「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別日本語文法講座6 接続詞・感動詞』90-135。東京：明治書院。  
 前田直子(2009)『日本語の複文：条件文と原因・理由文の記述的研究』東京：くろしお出版。



- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』 東京：くろしお出版。  
 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 東京：くろしお出版。  
 Matsumoto, Yo (1988) From bound grammatical markers to free discourse markers: History of some Japanese connectives. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 340-351.  
 岡崎友子 (2013) 「中古における接続語の使用傾向について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 167-176。  
 高谷由貴 (2017) 「『明治の文豪』における接続詞「と」について—接続助詞との共通点から—」『日本語学会 2017 年度春季大会予稿集』 105-112. 日本語学会。

## 調査資料

[近世]

「心中鬼門角」(中田猪同 1710 [宝永 7] 初演) 歌舞伎台帳研究会 (編) (1983) 『歌舞伎台帳集成 第 1 巻』 東京：勉誠出版。

「契情鸚鵡石」(奈良井文輔 1738 [元文 3] 初演) 歌舞伎台帳研究会 (編) (2003) 『歌舞伎台帳集成 第 45 巻』 東京：勉誠出版。

「聖遊廓」(1757 [宝暦 7]) \* 『洒落本大成』 第 26 巻 / 「河東方言箱まくら」(1822 [文政 5]) / 「玉菊全伝花街鑑」(1822 [文政 5]) \* 『洒落本大成』 第 27 巻 (1978-1988 東京：中央公論社) 国立国語研究所 (2015) 『ひまわり版「洒落本コーパス」(日本語歴史コーパス江戸時代編)』 [https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/edo.html#share](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share) (2017/10/15 確認)。

「通言総籙」(1787 [天明 7]) / 「一向不通替善運」(1788 [天明 8]) 洒落本大成編集委員会 (編) (1981) 『洒落本大成 第 14 巻』 東京：中央公論社。

「当世粋の曙」(1800 [文政 3]) 洒落本大成編集委員会 (編) (1986) 『洒落本大成 第 26 巻』 東京：中央公論社。  
 [近代]

「怪談牡丹灯籠」(1926 [大正 15] -1928 [昭和 3]) 三遊亭円朝 (著), 鈴木行三 (編) 『圓朝全集 巻之二』 (近代文芸資料複製叢書 第 4 集) 東京：世界文庫。(大正 15 年 - 昭和 3 年春陽堂刊の複製版)。

新潮社 (1997) 『新潮文庫 明治の文豪 CD-ROM 版』 東京：新潮社。

本文中に引用した作品名を以下に挙げる。本稿に挙げた用例は、全集や単行本を参照し、当該部分の認定に問題がないことを確認した。

二葉亭四迷『浮雲』『平凡』 / 夏目漱石『吾輩は猫である』 / 田山花袋『生』 / 田舎教師 / 泉鏡花『歌行燈』  
 『婦系図』

依田學海「政党余談淑女の後日」(1889 [明治 22]) 秋庭太郎 (編) (1969) 『明治文学全集 86 明治近代劇集』 東京：筑摩書房。

[現代語]

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 [https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/) (2017/07/19 確認)。

羽原大介・井筒和幸「パッチギ！」(2005 [平成 17]) / 内田けんじ「運命じゃない人」シナリオ作家協会 (編) (2006) 『年鑑代表シナリオ集 <05>』 東京：日本シナリオ作家協会。

## Study of Stage Directions in Modern Japanese: Research on the Conjunctive Usage of *to*

TAKAYA Yuki

Doctoral student, Osaka University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

Previous research on historical Japanese conjunctions has argued that no specific conjunctions exist and that they are derived from other parts of speech (Kyogoku & Matsui 1973, Okazaki 2013, etc.). It has also been indicated that, as a type of derivation, there is a change from connecting particles to connective expressions (Koyanagi 2016, Matsumoto 1988, etc.).

This paper discusses the relation of *to-gaki* (ト書き) with the formation of the connective expression *to* (ト) as observed in plays, literary works, and other narrative art, an aspect that has not been discussed in previous research.

The role of acting instructions observed in kabuki scripts and texts for dramatic scenarios and *to-gaki* is well-known. This *to-gaki* style was also employed in *sharebon* (洒落本) as a shared style called *wari-gaki* (割書). Examination of *to-gaki* and *wari-gaki* reveal several common features. Their influence is also prevalent in modern prose and literary texts. This paper analyzes *to-gaki* and *wari-gaki* and offers a hypothesis – an inherited element exists in the usage of *to* in quotations and conjunctive expressions in modern literary works.

The following content will be discussed in each section. First, issues in previous research regarding the conjunctive expression *to* will be indicated and second, the various usages of *to-gaki* will be analyzed. Subsequently, the usage of the connective phrase *to* in modern literary texts and their connection to *to-gaki* and *wari-gaki* will be explained.

**Key words:** descriptive part, conjunctive form, stage directions, *to*